常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ　seasonⅡ

令和３年６月２５日(金)

◇ 改革期　～「学校の新しい生活様式」の実践から見えたもの ～

コロナ禍での生活と、それに伴う【新しい生活様式】の実践。この中で見えてきたことがある。言い換えれば、コロナがあったから見えてきたものがある。「本当に大事なもの」と「見直していく余地のあるもの」の振り分けと考えてもよい。

「本当に大事なもの」とは、【きちんと行える授業】、そして【教員が子供と一緒にいる時間の確保】である。

授業の重要性は、昨年の休校期間に十分に授業が行えなかった経験や、未履修の学習内容の対応によるしわ寄せ感のある授業を行った教員なら、誰もが感じていることだろう。しわ寄せは、最終的に子供たちに及ぶのである。

現状でも確かに制約はある。音楽の歌唱や楽器演奏、家庭科の調理実習や体育の様々な運動など、工夫に迫られる。しかし、「子供たちのためになんとかできる方法はないか」と、教員が知恵を振り絞って生み出す工夫が、指導自体の熱量（熱心さ）を上げる。さらには、この一連の指導にかかわる取組が教師自身の指導力の向上につながり、最終的に子供たちに還元されるのだ。

教員が学校を離れる会議も大きく姿を変えた。会議が少なくなったばかりでなく、ネット会議の実施により、教員が学校を離れる機会が減少した。出張会議は、教員が早めに学校を離れる必要があるが、ネット会議ならぎりぎりまで子供と一緒にいることができる。授業をしっかり行い、子供を門から送り出して見送ることができる。子供も教員も安心感に満つ。やはり、子供にいい形で返ってきた。

対して、「見直していく余地のあるもの」は授業以外と言ってもよい。

行事については、「学校が実施するもの」「学校がかかわるもの」「子供や教員が他とかかわるもの」のいずれもがその対象として検討していく必要があろう。

実際のところ、これまで行ってきた行事の開催方法の変更や中止等により児童や教員にかかる負担が減少し、ひいては「きちんと行える授業」「じっくり考えることのできる授業」につながったケースも多い。これも子供たちへの還元だ。

確かに苦しい今だが、「様々なものを根本から見直す機会」を逃してはならない。